

環バルト海言語連合現象とポーランド語の特徴

—形態統語レベルにおける
共有諸特徴を中心として—

本 城 二 郎

0. 序論

本論では、バルト海沿岸地域に分布する主要言語、つまりスラブ語とバルト語とゲルマン語とウラル語の4語派が幾つかの共有言語特徴を持ち、それらは、この地域における長年の言語接触により形成されたと推定される地域特有の言語連合現象、つまり環バルト海言語連合現象 (Circum-Baltic Language Union) の存在により規定されていることを、主に、以下の現象におけるポーランド語および周辺言語の共有言語特徴を詳細に観察・抽出することにより検証し、当該言語連合現象の存在を実証する。

- i. 主語—目的語関係における形態格のバリエーション
- ii. 節レベル統語現象 (名詞/形容詞など非動詞述語、所有述語、比較構文、受動・脱主語・無主語構文)
- iii. 語順現象 (自由語順、“文頭位置”小詞による yes/no-疑問文)

なお、本論では、ポーランド語における多様な語順バリエーションの分布に基づき、西欧諸語に代表される SAE (標準均一欧州) 言語^{*1}を対極として、CB (環バルト海) 言語^{*1}が構成するこの言語連合体系内部においても観察される言語相補分布として、SAE 指向ゲルマン語 (スカンジナビア語/ドイツ語) —周辺的—、スラブ語/バルト語—中核的—、非印欧語 (フィンランド語/エストニア語) —中心的—が設定可能であることを実証し、プラハ言語学派の主要概念の一つ言語連合論の有効性について検証を試みる。

1. 環バルト海言語連合現象の諸特徴と分布

環バルト海諸言語が共有する特異な言語現象としては、大きく分ると、以下の3つの共有特徴 (小さく分けると、7つの共有特徴) の存在が広く知られている。

- i. 形態格と主語—目的語関係:

a. “部分” 属格目的語 (属格主語) vs. “全体” 対格目的語 (主格目的語)

Fin./Balt. (Lith./Latv.)/Slav. (Pol./North.-R.)^{*2}

- ii. 節レベル統語現象:

b. 名詞/形容詞など非動詞述語

“恒常的状况”の主格述語 vs. “一時的状况”の斜格 (具格・属格 etc.) 述語

Ural. (Fin. /Sam. Mordv. /Kom.) /Balt. /Slav. (Pol. /East.-Slav. (Ukr. /BeloR. /Rus.))

c. 所有述語

“HABERE” 所有タイプ German. (Swed.) /West.-Slav. (Pol.)

vs. “ESSE” 存在タイプ Lat. /East.-Slav.) /Fin.

d. 比較構文

小詞タイプ German. (Swed. /German)

vs. 離格・前置詞タイプ Balt. /Slav. (East.-Slav. (Ukr. /BeloR. /Rus.))

e. 受動・脱主語・無主語構文

受動文 East.-Slav. (R. /Belor. /Ukr.) /Swed.

vs. (無人称) 脱主語文 Fin. /Lith. /West.-Slav. (Pol. /Cz. /Slk.)

vs. 無主語文 Latv.

iii. 語順現象:

f. 基本語順

V 2 語順 vs. 強自由 SVO 語順 vs. 自由 SVO 語順

Scand. /German. Balt. /Slav. /Kom. Fin. /Est.

g. “文頭位置” 小詞による yes/no-疑問文

“文頭位置” 小詞タイプ Est. /Liv. /South.-Sam. /Balt. /Pol. /East. Slav.

vs. “文第2位置” 繫辞タイプ Fin. /North.-Sami /Rus.

vs. “文頭位置” 動詞タイプ German. /Est.

以下に、環バルト海言語連合現象の共有特徴ごとに、まず、ポーランド語における実例を列挙・分析し、その後、他言語の比較例を列挙し、各現象の分布状況を観察する。

2. ポーランド語の環バルト海的特徴：現代ポーランド語の地域言語学的特徴

ポーランド語に固有な環バルト海的特徴としては、動詞 *mieć* (持つ) による所有文のみが許容されることから、1つ (所有文における “HABERE (持つ)” タイプと “ESSE (ある)” タイプの併存) を除き、次の6つの現象が関与的であると考えられる。

“部分” 属格目的語／主語と “全体” 対格／主格目的語の対立の存在、“一時的状況” の具格・属格述語、比較構文における小詞タイプと離格タイプの併存、受動文と脱主語文と無主語文の併用、強自由 SVO 語順、“文頭位置” 小詞による yes/no-疑問文中でも、無人称再帰動詞脱主語文 (つまり、再帰動詞化による無人称化の結果、中性単数カテゴリーを付与された動詞による脱主語文) と非定動詞無主語文 (つまり、定動詞を欠く中性単数受動分詞による述語文) の2つは、前者が頻用されず後者が文法化されていない他の西スラブ語 (チェコ語、スロバキア語) に比べて、現代ポーランド語において特徴的な現象で、とりわけ口語で頻用されている。

無人称再帰動詞脱主語文：

(1) Tak **mu** się powiedziało. (彼は、(心ならず) そう言った⇨独り言を言った。)

tak(そのように), mu(彼)の与格, się(自身を), powiedziało <powiedzieć(言う)の過去3人称中性単数
非定動詞無主語文:

(2) **Gotowano** obiady i wieczerze. (昼食と夕食の準備ができています。)

gotowano <gotować(料理する)の受動分詞中性単数, obiady<obiad(昼食)の複数対格, i(~も), wieczerze
<wieczerza(夕食)の複数対格

2. 1. 形態格と主語一目的語関係

“部分”目的語(主語) vs. “全体”目的語(主語)に見られる格表示の対立・交代は、印欧語の初期段階から確認され、環バルト海言語(CB言語)による文法革新や影響(Balt. →Fin. →Rus.)を通じて多様なバリエーションが形成されてきた。とりわけ特異な現象として、主格目的語(Balt./North.-R./Swed.)と属格主語(Fin.:分格主語/Balt./Pol./North.-R.)は、フィン語との言語接触により強化された印欧語固有の現象で、頻度に相違があるものの、バルト語とロシア語北部方言において顕著である。

●共有特徴: “部分”属格目的語/主語 vs. “全体”対格/主格目的語の対立

“部分”属格目的語 vs. “全体”対格目的語の例:

(3) Pol. Jadtęm jadtęko. (私は、りんごを食べていた。) ☞^{*3} “全体”対格目的語

(4) Pol. Zjadtęm jadtęka. (私は、りんごを少し食べた。) ☞ “部分”属格目的語

主格主語 vs. 属格主語の例:

(5) Pol. Ojciec nie był w domu. /人称文/ ☞ “存在者/物”の主格主語

(父は、家にはいなかった。→他にいた?)

解釈: レーマ (Rh^{*4}) 要素: był w domu (家にいた) の否定、つまり焦点否定の文

Ojca nie było w domu. /無主語文/ ☞ “存在者/物”の属格主語

(父が家にいることは、なかった。)

解釈: レーマ (Rh) 文: ojciec jest w domu (父が家にいる) の否定、つまり全否定の文; テーマ (Th^{*4}) 要素は、(過去中性語尾-lo表示の) 過去のある時

Cf. 他言語の比較例 (フィンランド語、リトアニア語、スウェーデン語):

Fin. Söin omenaa/omenasta. (= (3)/(4)) ☞ “不完了”分格目的語/“部分”出格目的語

Lith. Duok man peilio. (私に少しナイフを貸してくれ。) ☞ “部分”属格目的語

North-R. Tam bylo i staryx monaxov. ☞ “不定量”の属格主語 (標準ロシア語では不可)

(あちらには、年配の修道僧もいた。)

Swed. Jan såg troligen en fågel. ☞ “不定対象物”の主格目的語

(ヤンは、恐らく一羽の鳥を見た。)

2. 2. 節レベル統語現象

節・文レベルにおける統語現象には、CB言語の場合、4種の構文、つまり非動詞(名詞/形容詞)述語、所有述語、比較構文、受動・脱主語・無主語文が関与的と見なされ、SAE言語に対する多様なバリエーションを形成している。基本的な傾向としては、西欧言語

に特徴的な定動詞述語&非〔主格一目的格〕シンタグラマからの逸脱現象が顕著で、それは、印欧語における保守性の残存および隣接非印欧語 (Fin.) からの影響と推定される。

2. 2. 1. 非動詞 (名詞/形容詞) 述語

主に印欧語の周辺(隅)地域の言語 (Fin. /Sam. /Mordv. /Kom. /Balt. /East.-Slav. /Pol.) に観察される現象で、非印欧語の特徴と見なされる。

名詞述語タイプ : E. Peter is a teacher. / 形容詞述語タイプ : E. Peter is young.

●共有特徴 : 格付与の二択性

“一時的状況”の斜格(具格・属格 etc.) 述語 vs. “恒常的状況”の主格述語

(部分) 属格(東スラブ語、ポーランド語)、様格(〜として) & 変格(〜に)(フィン語)、具格(〜で)(東スラブ語、ポーランド語、リトアニア語) ⇨ 非印欧語(ウラル語) 的特徴

(6) Pol. Ten wysoki blondyn jest pilotem. ⇨ być+一時的属性の具格名詞
(あの背の高い金髪の男は、パイロットです。)

(7) Pol. Ten wysoki blondyn to mój brat. ⇨ 同定の to+主格名詞
(あの背の高い金髪の男は、私の兄です。)

属格述語の例 :

(8) Pol. Posąg jest średnich rozmiarów z brązu. ⇨ “種類、タイプ”の部分属格
(立像は、中間サイズのブロンズです。)

Cf. 他言語の比較例(フィンランド語、ラトヴィア語、スウェーデン語) :

Fin. Varpuset ovat lintuja. ⇨ olla(です/ある)+主語への不依存表示の分格
(燕は、鳥です。)

Latv. Meitene esot/esot bījusi slima. (娘は、病気のようにです/だったようです。)
⇨ esot(〜のようだ)は関係法(MODUS RELATIVUS)の繫辞形で、女性単数主格形の補語 slima
は、主語 meitene に性・数・格が一致

Swed. Han verkar vara hes. (彼は、声がしゃがれているようだ。)
⇨ vara(です/ある)+主格補語 hes

2. 2. 2. 所有述語

所有述語には2つのタイプつまり“HABERE(持つ)”所有タイプ/SAEタイプ/と“ESSE(ある)”存在タイプ/CBタイプ/が存在するが、CB言語の場合、両タイプの併用現象は、印欧語とフィン語の接触地域となるバルト語と東スラブ語において顕著である。

“HABERE”所有タイプ vs. “ESSE”存在タイプ

“HABERE”所有タイプ : E. I have a book.

“ESSE”存在タイプ(位格・前置格所有タイプ) : Rus. U menja est' kniga.

●共有特徴 : 2タイプ(“HABERE”所有タイプ、“ESSE”存在タイプ)の併存

ポーランド語では、動詞 mieć(持つ)による所有文つまり主格所有者+“HABERE”所有/SAE語所有述語タイプ/がSAEへの接近を示している。

(9) Pol. (Ja) **Mam** książkę. (私は、本を持っている。)

(10) Pol. Książki nie **ma**. (ソーセージは、一本もない。) ☞ “否定”の属格目的語
他方、東スラブ語やバルト語では、“ESSE”存在+斜格所有者/CB 所有述語タイプ/
がフィン語への傾向を示している。以下、対応例として(9)’ (= (9)) を列挙する。

(9)’ Rus. U menja est’ kniga. [位格所有者：位格スキーマ]

Cf. Ne **imej** sta rublej! (100 ルーブルを持つな!) ☞ “否定”の属格目的語

Latv. Man ir grāmata. [与格所有者：目標スキーマ]

Cf. 他言語の比較例 (フィンランド語、スウェーデン語)

Fin. Minula on kirja. [接格所有者：位置スキーマ]

Swed. Jag har en bok. [主格所有者：“HABERE”所有]

2. 2. 3. 比較構文

通言語的観点から、(形容詞および副詞が固有の比較級を持つか否かにかかわらず) “比較の基準” (「～より」) を表示する形式的手段に基づき、比較構文は、次の3タイプに類別される。印欧語 (SAE 言語) における小詞タイプ/SAEタイプ/保持とフィン語における離格・前置詞タイプ/欧亜タイプ/保持の一方、中間地域 (Balt./East.-Slav./Pol.) においては、地域的影響関係 (例えば、Balt. → East.-Slav.) が観察される。

小詞タイプ vs. 離格・前置詞タイプ

- ・小詞タイプ：E. Peter is older **than** Paul.
 - ・前置詞タイプ：Lith. Kąs **už** gėnį margėsnis? (キツキより斑な色のものは何か?)
 - ・離格タイプ：Fin. Matti on Mikkoa **pitempi**. (マッティは、ミッコより背が高い。)
- 共有特徴：小詞タイプと離格・前置詞タイプの併存：

(11) Pol. Janek jest **milszy niż/od** Piotr/Piotra. (ヤネクはピョトルより素敵だ。)

☞ *niż* は文語的で、*od* は比較対象が名詞の場合かまたは比較主体が (意味) 主語の場合のみ可能

Cf. 他言語の比較例 (フィンランド語、リトアニア語、ドイツ語口語)：/小詞タイプ/

Fin. Matti on **pitempi kuin** Mikko. /小詞タイプ/ (= M. on Mikkoa *pitempi*.)

Lith. Mąno knyga yra **gerėsnė negu** tavo. (私の本は、君のより良い。)

Coll.Germ. Klaus ist **so groß/größer wie** ich. (クラウスは、私より大きい。)

/小詞タイプ/

2. 2. 4. 受動・脱主語・無主語文

文中における動詞一致要素からの主語の後退を表示する文法手段としては、受動化 (降格主語の背景化) と脱主語化 (中性単数カテゴリー [主語機能] の付与による動詞の無人称化と離脱主語の潜在化) と無主語化 (中性単数カテゴリー [状況機能] の付与による動詞の無人称化と主語の \emptyset 要素化) の3種が存在し、それぞれ、受動文と脱主語文と無主語文が対応することになる。受動文は、バルト語の一部 (Latv.) を除き、文法手段における分析 vs. 再帰の対立・分布があるものの、CB 言語全般に汎用される他、脱主語

文は、無人称受動分詞 (Fin./Lith.) vs. 無人称再帰動詞 (Swed./Lith./East.-Slav.) の対立・分布が関与的で、無主語文は、その機能が man/on 等総称代名詞 (Germ.) により代用されるものの、SAE 言語には存在せず、フィン語から受容したバルト語の一部 (Latv.) や文法革新により発達した西スラブ語 (特に、Pol.) において顕著である。

●共有特徴：受動文 vs. (無人称) 脱主語文 vs. 無主語文

受動文：

(12) Pol. Dom **był budowany** przez spółdzielców.

Dom (家), był<być(～です)の過去男性単数3人称, budowany<budować(建てる)の受動分詞男性単数, przez(～により)
(家は、協同組合員により建てられた。)

(13) Pol. Dom **się buduje** pięć lat (przez spółdzielców).

się(自身を)再帰代名詞対格, buduje<budować(建てる)の3人称単数現在, pięć5, lat<rok(年)の複数属格
(家は、(協同組合員により)5年間建築中です。)

脱主語文：-no/-to (無人称過去分詞)による脱主語文：

(14) Pol. Na wieczorze Jana **tanczono, śmiano się i pito** wódkę.

na(～で), wieczorze<wieczór(晩のパーティー)の単数前置格, Jan<Jan(ヤン)の単数属格,
tanczono<tańczyć(ダンスをする)の受動分詞中性単数=無人称過去形, śmiano<śmiać się(笑う)の無人
称過去形, i(～も), pito<pić(飲む)の無人称過去形, wódkę<wódka(ウオッカ)の単数対格

(ヤンのパーティーで、人々はダンスを踊り、笑い、ウオッカも飲んでいて。)

無主語文：

(15) Pol. Drogę **zawiało** śniegiem. (道路は、雪で覆われた/道路を雪が覆った。)

drogę<droga(道)の単数対格=意味上の主語, zawiało<zawiać(一面に覆う)の過去中性単数=無主語動詞,
śniegiem<śnieg(雪)の単数具格

Cf. 他言語の比較例 (フィンランド語、リトアニア語、スウェーデン語)：

Fin. Karhu (Hänet) **ammuttiin**. (熊は、撃ち殺された。) /受動文/

On (Oli) **sanottu** että ... (～と言われている/た。) /脱主語文/

Mikko **nukuttaa**. (ミッコは、眠い<?ミッコを眠くさせる。) /無主語文/

Lith. Šitas arkl̃ys m̃ano **pirktas**. (この家は、私に買われた。) /受動文/

Čĩa vilko **bégta**. (ここは、恐らく狼が走ったのだ。) /脱主語文/

M̃an **skaũda** g̃alva. (私は、頭が痛い<?私の頭を痛める。) /無主語文/

Swed. Barnet **är älskat/älskas** av alla. (その子は、皆に可愛がられている。)

/受動文/

Det **dansades** hele kvällen. (彼らは、一晩中踊っていた。) /脱主語文

2. 3. 語順現象

CB 言語に特徴的な語順現象としては、文語順では、SOV>SVO の移行とそれに伴う印欧語的特徴およびウラル語的特徴の保持 (例えば、定動詞の発達、豊富な格体系など) に

よる自由語順への傾向が広く観察されている。他方、CB言語の疑問文、特に yes/no-疑問文は、要素語順が疑問モダリティ表示子（つまり、文頭小詞 vs. 文第2位置繫辞 vs. 文頭位置動詞）との関係で決定づけられることが確認されている。

2. 3. 1. 基本語順

欧州語の文は、3つの統語的文要素、すなわちS（主語）とV（定動詞）とO（目的語）の可能な配列に基づき、次の5つの語順タイプに分類することが可能である。

固定SVO語順、V2語順^{*5}、強自由SVO語順^{*5}、自由SVO語順^{*5}、固定SOV語順
 そのうち、CB言語（Fin./Balt./Slav./German. (Germ./Yidd./Scand. (Swed.))その他）に
 関与的なものとしては、相対的自由語順により特徴づけられた語順、つまり、**V2語順**
 (Scand./Germ.) —周辺的—、**強自由SVO語順** (Slav./Balt./Kom.) —中核的—、**自由SVO語順** (Fin./Est.) —中心的—の3タイプのみである。（ちなみに、それら以外は、隣接する非CB言語圏に特徴的な固定語順のグループを形成することが観察される）

●共有特徴：V2語順 vs. 強自由SVO語順 vs. 自由SVO語順の対立

- i a. 強自由SOV語順：ラテン語、古代ギリシャ語
- i b. 強自由SVO語順：スラブ語、バルト語、コミ語、ウエプス語、その他
- ii. 自由語順タイプ：
 - ii a. 自由SVO語順：フィンランド語、エストニア語
 - ii b. V2語順：スカンジナビア語、ドイツ語
- iii. 固定語順タイプ：
 - iii a. 固定SOV語順：ヒッタイト語、ネネツ語
 - iii b. 固定SVO語順：英語

	iii b	ii b	i a	ii a	iii a
固定SVO語順		V2語順	強自由SVO語順	自由SVO語順	固定SOV語順
英語		スカンジナビア語	スラブ語/バルト語	フィンランド語	ヒッタイト語
		/ドイツ語	/コミ語	/エストニア語	/ネネツ語

i b

強自由SOV語順

ラテン語/古代ギリシャ語

強自由SVO語順の例：

(16) Pol. Nil przepływa przez Egipt. (ナイルは、エジプトを貫流している。)

S:Th^{*4} V:Tr^{*4} ADV(副詞句):Rh^{*4}

Nil przez Egipt przepływa. (ナイルは、エジプトは、貫流している。)

S:Th ADV:DTh^{*4} V:Rh

Przez Egipt przepływa Nil. (エジプトは、ナイルが貫流している。)

ADV:Th V:Tr S:Rh

(17) Pol. Duszą towarzystwa był zięć Kowalskich. Młody architect ...

01:Th1 V1:Tr1 S1:Rh1 S2:Th2

(一座の中心人物は、コヴァルスキの娘婿でした。(その)若い建築家は、...)

Cf. 自由 SVO 語順 (フィンランド語) の例 :

Fin. Mikko syö lunta. Täällä sataa lunta.

ミッコ 食べる 雪を ここに/で 降る 雪が/分格/

(ミッコは、雪を食べている。ここには、雪が降っている。)

Lunta Mikko syö. Lunta täällä sataa. ☞ 目的語文頭位置による分裂文

(ミッコが食べているのは、雪だ。ここで降っているのは、雪だ。)

V2 語順 (スウェーデン語) の例 :

Swed. Jan såg en fågel. (ヤンは、鳥が見えた。)

Igår såg Jan en fågel. (昨日、ヤンは鳥が見えた。)

Vad såg Jan? (ヤンは、何が見えたか?)

可動助動詞を含む語順の例 :

(18) Pol. Ja powiedziała-by-m. (私は、言いたいのだが/あえて言うと。)

Ja-by-m powiedziała.

S:Th V:Rh

2. 3. 2. “文頭位置”小詞による yes/no-疑問文

yes/no-疑問文の文法手段に関しては、CB 言語においては、文頭小詞—中核的—vs. 文 2 位置繫辞—中心的—vs. 文頭位置動詞—周辺的—の対立・分布を示している。中でも、文頭小詞の文法化に際しては、バルト語や一部スラブ語における文法革新、エストニア語へのバルト語の影響、イディッシュ語へのスラブ語の影響、スウェーデン語へのフィンランド語の間接的影響の4つが主要な動因を構成すると見なされる。

●共有特徴：“文頭位置”小詞タイプ vs. “文第2位置”繫辞タイプ

vs. “文頭位置”動詞タイプ

yes/no-疑問文の文法手段としては、SAE 語における“文頭位置”動詞に対して、バルト海沿岸諸言語 (CB 語) には次の3つのタイプの存在が確認されている。

i. “文頭位置”小詞タイプ

(バルト語、ポーランド語、白ロシア語、ウクライナ語、エストニア語、リヴォニア語、南サミ語) —中核的—

Lith. Ar jis ateis? (彼は、来るだろうか?)

/Nežinau, ar jis ateis. (彼が来るかどうか、私は知らない。)

ii. “文第2位置”繫辞タイプ：“文第2位置”繫辞的小詞+“文頭位置”動詞

(北サミ語、フィンランド語、ロシア語) —中心的—

Fin. Tuleeko hän? (一同上) /En tiedä, tuleeko hän. (一同上)

iii. “文頭位置”動詞タイプ (ゲルマン語、エストニア語) 一周辺的/SAE語タイプ/—
Swed. Kommer han? (一同上一) /Jag vet inte om han kommer. (一同上一)

●ポーランド語に見られる共有特徴：“文頭位置”小詞タイプ

(19) Pol. Czy przyjdzie? (彼は、来るだろうか?)

/Nie wiem, czy on przyjdzie. (彼が来るかどうか、私は知らない。)

Cf. 他言語における yes/no-疑問文の比較例 (白ロシア語、イディッシュ語、ドイツ語) :

Belor. Ci ty znaeš jago? (君は、彼を知っているか?)

Yidd. Tsi zogst du mir ersht itst? (君は、今初めて僕に話しているのか?)

Germ. Liebt Heinrich die Frau? (ハインリヒは、その女性を愛しているか?)

(注) *1 「CB言語」(Circum-Baltic languages) という用語は、Dahl(2001)において頻用され、欧州地域言語学の基本概念として汎用されている「SAE言語」(Standard Average European languages) とともに、バルト言語学の新語となりつつある。

*2 (語派別) 言語名の略称は、以下の通りで、以下それに準拠する。

Ural. ウラル語 : Fin. フィンランド語/Est. エストニア語/Sam. サミ語/Kom. コミ語/Mordv. モルドヴィン語/Nen. ネネツ語

Balt. バルト語 : Lith. リトアニア語/Latv. ラトヴィア語/Liv. リヴォニア語

Slav. スラブ語 : West. -Slav. 西スラブ語 :

Pol. ポーランド語/Cz. チェコ語/Slk. スロバキア語

East. -Slav. 東スラブ語 :

Rus. ロシア語/North. -R. ロシア語北部方言/South. -R. ロシア語南部方言/Belor. 白ロシア語/Ukr. ウクライナ語

German. ゲルマン語 : Germ. ドイツ語/Coll. Germ. 口語ドイツ語/Swed. スウェーデン語/Yidd. イディッシュ語/E. 英語

*3 ☞記号は、付加説明を表す。以下、これに準拠。

*4 Th (テーマ)、Tr (移行)、Rh (レーマ) は、プラハ言語学派の FSP (機能的文構成) 理論における主要伝達機能要素を表し、無標の場合、その順序 (つまり Th-Tr-Rh) で配列され、伝達価値の漸進的な発展を実現する。なお、Th 要素が細分化された場合、Th 要素中で最も高い伝達価値を持つものを DTh (ダイア・テーマ) とし、他の Th 要素と区別する。

*5 V2 語順は、無標で文第 2 位置が義務的な V (動詞) 要素を除き、他の文要素が比較的自由的なタイプである。強自由 SVO 語順は、文要素の文法機能が主に接辞・前置詞等により表示され、文位置が文法機能から解放された結果、語順が伝達機能 (FSP) の要件 (Th-Tr-Rh) に従い、強い自由度を持つタイプである。自由 SVO 語順は、文頭位置目的語による分裂文その他 (例えば Est. における V2 傾向) の弱い制約が存在するものの、無標では自由語順を示すタイプと見なされる。

3. 結論

環バルト海言語連合現象を構成する7つの共有特徴の具体例比較分析より、ポーランド語において、以下の傾向的特徴が観察された。

- i. ポーランド語は、環バルト海諸語の7つの共有特徴のうち6つ（“部分”属格目的語／主語 vs. “全体”対格／主格目的語の対立の存在、“一時的状況”の具格・属格述語、比較構文における小詞タイプと離格タイプの併存、受動文と脱主語文と無主語文の併用、強自由SVO語順、“文頭位置”小詞によるyes/no-疑問文）を、文法化により実現し、CB言語において中核的位置を占めつつある。
- ii. ポーランド語は、共有特徴の一つ、所有文における“HABERE（持つ）”タイプと“ESSE（ある）”タイプの併存に対し、“HABERE（持つ）”タイプ（Pol. *mieć*）のみを持つという点で、両タイプの併存を許容する東方の隣接言語（Lith./East.-Slav.）や“ESSE（ある）”タイプのみを許容する北方の近接言語（Latv./Fin.）とは線引きされ、“HABERE（持つ）”タイプのみを許容する西方の隣接言語（Swed./Germ./Yidd.）や南方の隣接言語（Cz./Slk.）とともにSAE言語への接近を実現しつつある。
- iii. 節・文レベルの共有特徴に対して多様なバリエーションを持つCB言語の1つであるポーランド語は、バルト語とともに（西欧語に特徴的な定動詞述語&非〔主格一目的格〕シンタグマに代表される）SAE言語からの逸脱傾向が相対的に顕著である。それは、印欧語における保守性の残存および隣接非印欧語（Fin.）の影響と推定される。

参考文献：

- Comrie, B. et al. (1993): *The Slavonic Languages*, Routledge:London.
- Dahl, Ö. et al. (2001): *Circum-Baltic Languages Vol. 1-2*,
John Benjamins Publ.:Amsterdam.
- Erhart, A. (1982): *Indo-evropské jazyky (Indo-European Languages)*, Academia:Praha.
- 本城 二郎 2000: 「スラブ・ゲルマン言語接触—中欧言語連合現象およびチェコ語・ソルブ語・ポラブ語の分析性—」, 『ニダバ』第29号.
- Horálek, K. (1962): *Úvod do studia slovanských jazyků (Introduction to the Study of Slavic Languages)*, SPN:Praha.
- 亀井 孝、他編 1998: 『言語学大辞典セレクション：ヨーロッパの言語』（三省堂）.
Kontaktlinguistik (Contact Linguistics) Vol.2 edited by Hugo Steger et al.,
Walter de Gruyter:Berlin, 1997.
- Kurzová, H. (1997): “Morphosyntactic processes in Europe”,
Proceedings of LP' 96 (ed. by B. Palek), Charles University Press:Praha.
- Siewierska, A. (1998): *Constituent Order in the Languages of Europe*,
Mouton de Gruyter:Berlin/New York.